# 命の残り

夫 和田芳惠

和田静子

河出書房新社

命の残り　夫和田芳惠

一九八九年九月二五日　初版印刷
一九八九年一〇月五日　初版発行

著者　和田静子
装画　岡鹿之助
発行者　清水勝

発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話　四〇四―一二〇一（営業）
四〇四―八六一一（編集）
振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷　暁印刷株式会社
製本　小泉製本株式会社
Printed in JAPAN
© Wada Shizuko 1989
ISBN 4-309-00590-X

和田芳恵、昭和39年２月、直木賞受賞のころ、
大田区上池台の自宅にて（撮影・稲村不二雄）

目次

「日本小説」のころ　5
麻布森元町のころ　38
来し方を　82
命の残り　119
和田芳惠年譜　153
あとがき　162

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 命の残り

夫 和田芳惠

# 「日本小説」のころ

和田のことを少しばかり書かなくてはと思い始めてから、一体どうしてどの辺から親しくなったのだろうと考えてみるようになりました。私が大地書房という新興出版社に入りましたのはたしか昭和二十二年の初夏の頃だったと思います。父親が顧問弁護士のようなことをしておりました関係で社長に紹介してもらったのでした。上野駅から都電で水天宮の終点まで乗り、そこから当時まだ渡ることの出来た鎧橋の手前まで歩いたのです。初めて面接に行く時、都電の中で、見るからに編集者ら

しき風体の方が脇に抱えておられた雑誌が後になって考えますと「日本小説」の創刊号だったのです。その方が外の方であったのか大地書房の社員だったのか、未だにわかりません。くっきりと朱文字で「日本小説」と書かれてあったタイトルと川端龍子の描かれた表紙絵、それだけが頭に残っておりました。といってもその雑誌がこれから入社したいと思っている大地書房から出たということはその時は知りませんでした。

いよいよ入社を決めていただき、私の職場は経理ということになりました。経理部長は羽田さんという方で、この方の奥様が川端康成夫人の妹さんだということが後になってわかりました。この羽田さんと社長の弟さんと私、そしてもう一人女性の方が経理の事務をしておりましたが、経理の部屋の直ぐ隣りが編集室で「日本小説」他数誌、また単行本もいろいろと出しておりまして、その担当者の方達がよく経理の部屋にみえたものでした。大抵は稿料や画料の催促、そして御自分達の給料の前借とか、中には一緒に飲みに行きましょうと誘いに来る方もありました。

どう思い出してみましても最初数ヵ月は和田と接した記憶は全くありません。やがて秋の頃「長さん（私の姓が長島でしたので社の方達は皆長ちゃんと呼んでおりました）お汁粉屋へ案内したいんだけど、手が空いていたら一寸付き合いませんか」と遠慮勝ちに誘われたのです。その頃から和田は大変老けて見えまして何となく父のお友達にでも誘われたような気分になり、すんなりと従いて行ったのでした。人形町の表通りから少々路地に入りました処にその店はありました。店構えは小さいのですが小粋な感じで当時闇の物資を使って商っていたとみえ、本物の味を楽しむことが出来ました。たしか和田がお汁粉で私はお雑煮の方が好きだからと別々の品を注文したように思います。初めは家庭のことなんかそれとなく訊ねられたりしたのですが、和田自身の家庭のことには全く触れないのでした。それから度々私を誘っては豚カツを食べに行ったり、お寿司屋に行ったりしておりましたが、会うたびに私に「一緒に仕事をしないか」と言うようになりました。やがて大地書房と訣別し、日本小説社となって和田達は出て行きました。そこで私も一緒ということは



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大地書房を辞めてということだったわけですが、私は入社の際の義理がありますし、また父の手前もありまして早々にそのような行動は出来なかったのです。そのことを和田はずっと後になってからも、お前が早くに日本小説社に来てくれていたら、様子はまた変っていたかも知れないのにと度々申しまして私を詰るのでした。

「日本小説」五月創刊号の目次を開いてみました。

〔名作絵物語〕

シラノ・ド・ベルジュラック　鈴木信太郎解説

〔小　説〕

深　淵　高見　順

人間模様　丹羽文雄

母の肖像画　林　房雄

女　神　太宰　治

裸　婦　　関伊之助
肺が歌ふ　　林芙美子

（放浪記第三部）

装画〔表紙〕川端龍子　〔目次カット〕岡鹿之助
〔四色口絵〕藤田嗣治　〔内扉〕吉村忠夫
〔挿画〕三雲祥之助　桜井浜江
鈴木信太郎　向井潤吉
宮田重雄　木村荘八

何と錚々たる顔ぶれではありませんか。用紙の割当ても厳しくて頁数も少なく、紙も仙花紙といった再製品のひどいものでしたが、文化に飢えていた人々が飛びつくように買い求めたようでした。

和田が執筆した編集後記を読んでみます。

○五月創刊号を編集し了へた。今は何も云ひたくない。長いあひだ頭のなかで考へてゐたものがここに形をとつた。それだけの事でしかない。この絵で飾られた小説ばかりの雑誌が、やがて読者の手にわたり、どのやうに読まれ、どんな価値を与へられるかは、もう、私達の悔恨や自負を越えたところにある。

○総ての面で日本は絶望的であるやうだ。しかし、私達は日本人以外ではあり得ないのだ。この痛苦と困難を日本民族が克服しなければならない。日本の小説を押し進めて行つても、何も出てこないのではないかと愁へてゐる人もゐる。そして私共も必ずしも現在の小説をもつて満足するものでもない。しかしどんな事でも最後までやつて見てからの事だと思ふ。

○はじめはこの倍ほどの厚さの雑誌を出すつもりであつたし、また地方の電燈の暗さを考へてこれに使用した八ポイントの活字より大きい九ポイントにする筈であつた。しかし、用紙難から来る内容の弱体化を救うためにこのやうな結果になつたが、現状ではどうすることも出来ない。

○顧るとこの雑誌に協力された作家画家の好意に甘えて大変無理なことばかり云つた。大変すまなく思ふのだが今後とも御迷惑をお掛けして良い小説雑誌にしてゆくつもりだ。

○「かねて、私は小説芸術の正しい通俗性を信じ、それを実行にうつしたいと考へてゐた。高い根抵を持つ小説を狭い実験室から解放して、手をのべてゐる多数の所有にしたいからであつた。独り合点の個人主義に立つ無味乾燥を、何か高踏的な芸術性とはきちがへてゐる態度を打ち破るのが、行き詰りに行き詰つてゐる小説を救ふ唯一の方法であると思ふ。その意味で、低劣な常識にだけ媚びた通俗小説が、それらが対象とする読者層にさへ嫌厭されはじめた今日、小説の本道は自ら拓かれ直す機縁に会してゐると云へるだらう。」と死んだ武田麟太郎氏が述べたのは昭和十三年の夏であつた。現在も教へられるところがある言葉であらう。

○私共は立派な仕事に素直に頭をさげると同時に広い一般の文化水準に坐る喜

びを感じその線からじつくりと雑誌を築きあげてゆかうと思ふ。この雑誌についての色々な感想は率直に編輯部宛に申して戴きたい。

創刊に漕ぎつけた思いを努めて抑えるように書かれております。目次に見える関伊之助はこの時限りとなった川口松太郎氏のペンネームでした。

「横になって枕に顎をのせていると、畳の目なりに借金とりが波のように押し寄せて来るようだ」と誰に言うとなく呟くのを聞いておりましたら、この人はもう身も心もぼろぼろで、遠からず逃げ出さなくてはならないらしいと感じとっておりました。

「うちの社へ来てくれ、どうしても来てもらいたい」と再三の依頼で私が日本小説社に来た時は、既に積り積っていたあまりの額の借金に驚いてしまいました。給料

も決めただけきちんと手にしたことは一度もなく、二千円、三千円と分割で貰ったものでした。

茨城県古河の母親の許（当時私の両親は別居中）からお弁当持ちで通勤していた私は時折食物らしいものを会社まで運んだこともありましたが、乏しい中で僅かずつ分ち合うということは今頃では考えられないことですが、私はあの日のことを好ましい思い出としているのです。

会社といっても一つの部屋に仕切りもなく、机と椅子が人数だけそれぞれがブロックになっており、電話も一つしかありませんでした。

隣りは「留女書店」と言って「素直」という雑誌や尾崎一雄さん達の単行本を出したりしているところでしたが、男性二人に女性一人といった構成だったと思います。

また一方の隣りは公認会計士の方が社長で、中堅社員一、若い社員一、お茶汲みの若い女性一、といった風でした。そしてもう一つの会社は私達二つの会社を合わ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com